

支城網と堅城で対決を選んだ

——名門の最期 北条氏政・氏直

北条氏は、名門戦国大名として初代・北条早雲（伊勢盛時）以来、五代100年にわたって関東を治めました。小田原城は早雲入城以来、難攻不落を誇り、永禄4年（1561）に長尾景虎（上杉謙信）、同12年に武田信玄に攻め込まれても持ちこたえた堅城でした。

豊臣秀吉は主君・織田信長の没後、徳川家康に政治的に勝つて関白となり、中国、四国、九州の平定に成功。そして信長の同盟者だった家康を上洛させ（臣従の意味をもつ）、全国統一まで残すところは関東と東北だけとなりました。

早雲から数えて四代目の氏政は、天正16年（1588）に秀吉からの上洛要請を蹴り、弟を名代に上洛させました。このとき、北条氏と真田昌幸の紛争が起きて

いた沼田領（群馬県沼田市）について裁定を行い、北条氏、真田氏の分割統治が決まったのです。

しかし、北条氏が真田氏の名胡桃城（群馬県みなかみ町）を急襲して奪い、豊臣政権が言い渡した私戦停止の約定を破る事態が起きたのです。当時、秀吉は政権のトップとして私の合戦を禁止していません。秀吉は激怒し、全国の大名に北条氏討伐の命令を出しました。

第一次上田合戦は北条氏と真田氏の沼田領をめぐる争いが原因だったのですが、またしても北条—真田間の沼田領問題が小田原の戦いを引き起こすことになったのです。まず、前田利家と上杉景勝が上田へ向かい昌幸（一説には信之・信繁も）と合流し、3万5000人の軍勢が沼田

方面へ出陣しました。

北条氏は箱根と神奈川から東京・群馬・埼玉・千葉・茨城に及ぶ支城網で対抗する作戦でした。しかし、全国の大名を動員した20万人以上の大軍は、小田原城を包囲したまま、広範囲に及ぶ支城を次々に攻め落としていきました。

北条氏と同盟関係にあった奥州の伊達政宗も秀吉方に参陣し、小田原城内では和議と抗戦をめぐって結論の出ない議論を繰り返しました。

小田原籠城は3か月におよび、ついに氏直（氏政の後継）は勝ち目がない戦いを諦めて、降伏を決めたのです。

小田原が堅城だったがゆえに、北条氏は天下人相手に抗戦を選び、滅亡することになったといえるでしょう。

北条氏時代の小田原城



小田原城惣構えの範囲

外側のラインは、山王川から早川に及ぶ北条氏時代の惣構えの範囲。また、現在の本丸の北側に古郭があったことにも注目したい。
国土地理院空中写真を基に『小田原市史 資料編中世II、別編城郭』を参照して作成。

北条早雲像

北条五代の祖にして、いち早く「戦国武将」として小田原城に入った。
 写真/小田原市観光課



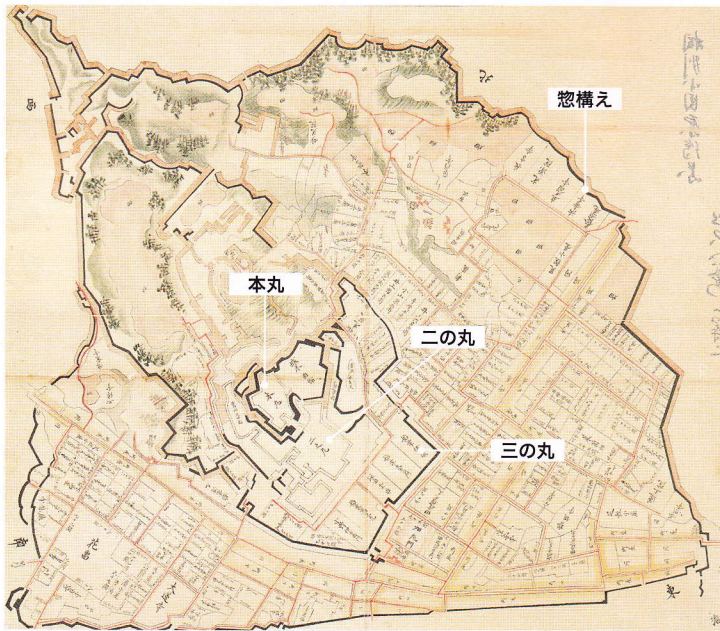
城下を内包した要塞

15世紀の末、北条早雲が入城して以来、小田原城は100年の間に拡張を繰り返してきました。

北条氏時代の中心は、現在の復興天守がある本丸ではなく、東海道本線や新幹線を隔てた北側にある、八幡山古郭と呼ばれるあたりでした。

本曲輪と周囲の八幡山古郭は曲輪を設けており、これらの曲輪を囲う形で二の丸ほかの外郭を造っていました。永禄12年(1569)の大普請では二の丸の外側を拡張してさらに三の丸を築いており、三の丸からは障子堀(49、50、126ページ)を発掘しています。

そして、秀吉との対決に備えて北条氏は、これらに加えて、惣構えを設けました。



POINT!

小田原城、ここがポイント

小田原城は町全体が“城”

惣構えの全長は約9kmもあった!

「相州小田原絵図」(松原図)

江戸時代に描かれた絵図で、惣構えの中に、道路が格子状に通る城下の様子がわかる。

小田原市立図書館蔵



北条氏時代の障子堀

三の丸から発掘された障子堀の遺構。山中城を守った障子堀は小田原城にも掘られていた。

『小田原市史 資料編中世II、別編城郭』より転載

石垣山城

秀吉が小田原の西南・笠懸山に築いた城。およそ80日間で築城し、完成後に周囲の木々を切って突然見えるようにしたので「一夜城」と呼ばれた。総石垣で天守台も築かれた本格的な城であった。写真は関東大震災でも崩れなかった井戸曲輪の石垣。

撮影/岡 泰行



笠懸山

石垣山城

体ですつぱりと囲い込むものでした。全長は約9kmもあったようです。小田原の戦いでは、豊臣軍が惣構えの外周を包囲した持久戦になりました。

空中写真や江戸時代の絵図(上)を見ると、東西南北に道が走り、街区を整理した町並みが見て取れますが、このうち正南北方位の街区は、北条氏時代の城下にさかのぼるものでした。

また、御用米曲輪の発掘調査では、きれいな切石をタイルのように敷き詰めた庭園も出てきました。このきれいな石は墓石を転用したものです。こうした転用材(石)はほかの城でもよく見られました。

この庭園などは、第二の陣の躑躅ヶ崎館の「主殿」(30ページ)と同じように、伝統的な屋敷で権力の正当性を示したものでした。幕府の執事一族の出身であった早雲以来の伝統と権威をアピールし、文化と伝統を重視して関東を治めた北条氏の政治姿勢がうかがえるではないですか。

この小田原城の惣構えと、次に紹介する山中城を中心とした箱根支城網、さらに関東一帯に広がった八王子城(東京都八王子市)などの支城網の整備と強化に自信があったことも、北条氏が秀吉との戦いの道を選んだ要因となっていたのです。

ここが見所! 1

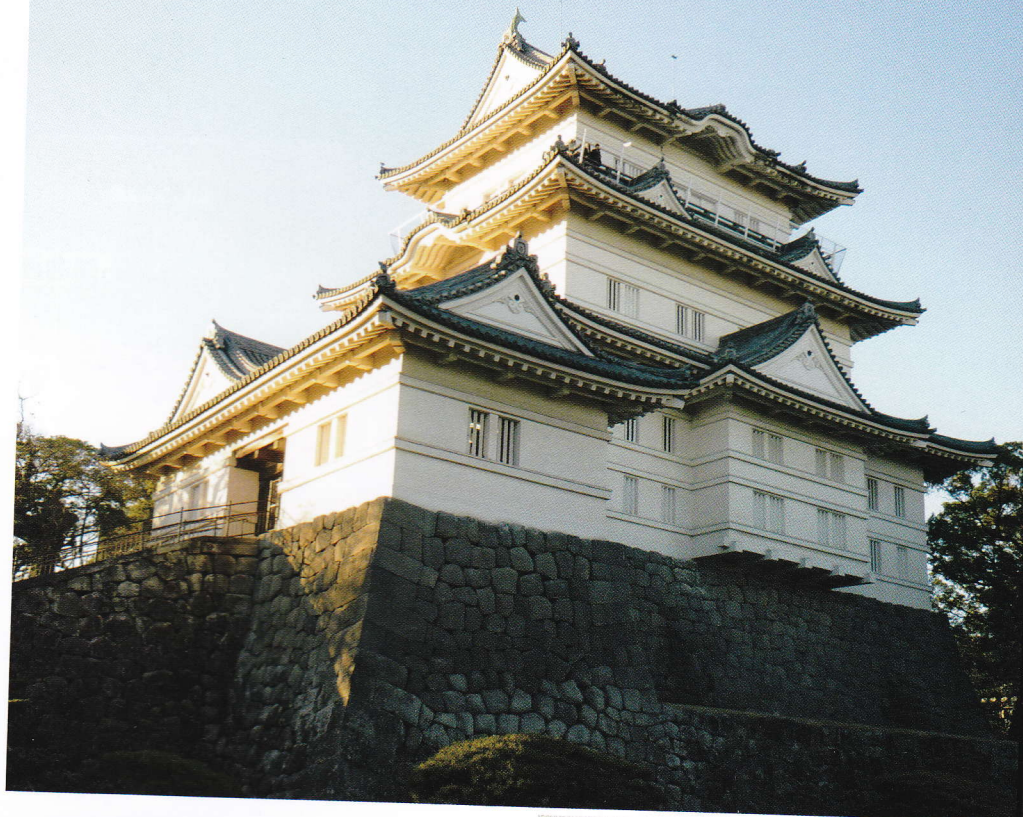
復興天守、櫓、門

復興した天守は
小田原のシンボルに!

小田原城天守

石垣高約11.5m、天守高約27.2mで、昭和35年(1960)に江戸時代の図や雛形を参照して復興天守として建てた。内部には刀剣、甲冑、絵図などを展示している。

写真/小田原市観光課



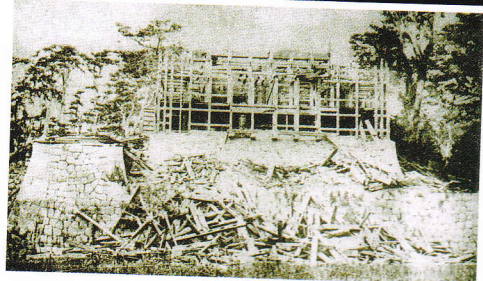
その後の小田原城と現在



二の丸隅櫓

小田原城へ行くときまず目に入るのが隅櫓。大正時代まで現存したが、関東大震災で崩れ、昭和9年(1934)に再建した。

写真/小田原市観光課



解体が進む天守

明治3年(1870)からの解体工事の様子。解体後の天守台には大久保神社を建てた。

写真/個人蔵

破壊後、近世城郭として再建

小田原の戦い後、北条氏旧領に家康が移り、小田原城には家臣の大久保忠世が入城しました。大久保氏は二代目が失脚して城代が置かれるようになり、家康は惣構えなどの破壊を命じます。

その後、阿部氏を経て、寛永9年(1632)には、稲葉正勝が入封。現在の本丸、二の丸、三の丸の整備を幕府が大名を動員した天下(公儀)普請で行い、小田原城は近世城郭として生まれ変わりました。稲葉氏の次には、大久保忠朝が入封し、明治時代まで大久保氏が城主を務めました。

明治維新後、ほとんどの建物を壊し、残った二の丸隅櫓も関東大震災で倒壊しました。

小田原城のここを見よう!

昭和35年(1960)に復興天守(右上)を鉄筋コンクリートで建設し、以後、銅門(47ページ・右)、馬出門(47ページ・左)などを復元しています。二の丸の表門である銅門、本丸の正面に位置する常盤木門の迫力を実感してください。

また、西へ足をのばすと、小峯御鐘ノ台大堀切り(44ページ)があり、幅約30

銅門

二の丸の正門。銅で装飾したのでこう呼んだ。橋に面した内仕切り門と奥に建つ銅門によって内枳形となっていた。平成9年(1997)に復元。

写真/小田原市観光課



馬出門

馬屋曲輪から正面出入り口につながった門。一方を水堀、三方を土堀で囲んだ。平成21年(2009)に整備。

写真/小田原市観光課

ここが見所! 2

堅牢な造りの門

復元した門の大きな枳形を体感しよう!

小田原城へ行こう!

指定文化財 国指定史跡

住所

神奈川県小田原市城内地内(小田原城址公園)

別称 小峯城

築城 15世紀中頃

築城者 大森氏、(後)北条氏、大久保氏、稲葉氏

主要城主(改修者) 北条早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直・稲葉氏・大久保氏

アクセス

【電車】

「小田原駅」東口から徒歩約10分

【自動車】

小田原厚木道路「荻窪IC」から西南へ約10分

西湘バイパス「小田原IC」から東へ約5分
*周辺の有料駐車場を利用



①天守 (p.40・46)

②二の丸隅櫓 (p.46)

③銅門 (p.47)

④馬出門 (p.47)

⑤常盤木門

⑥鉄門跡

⑦字櫓

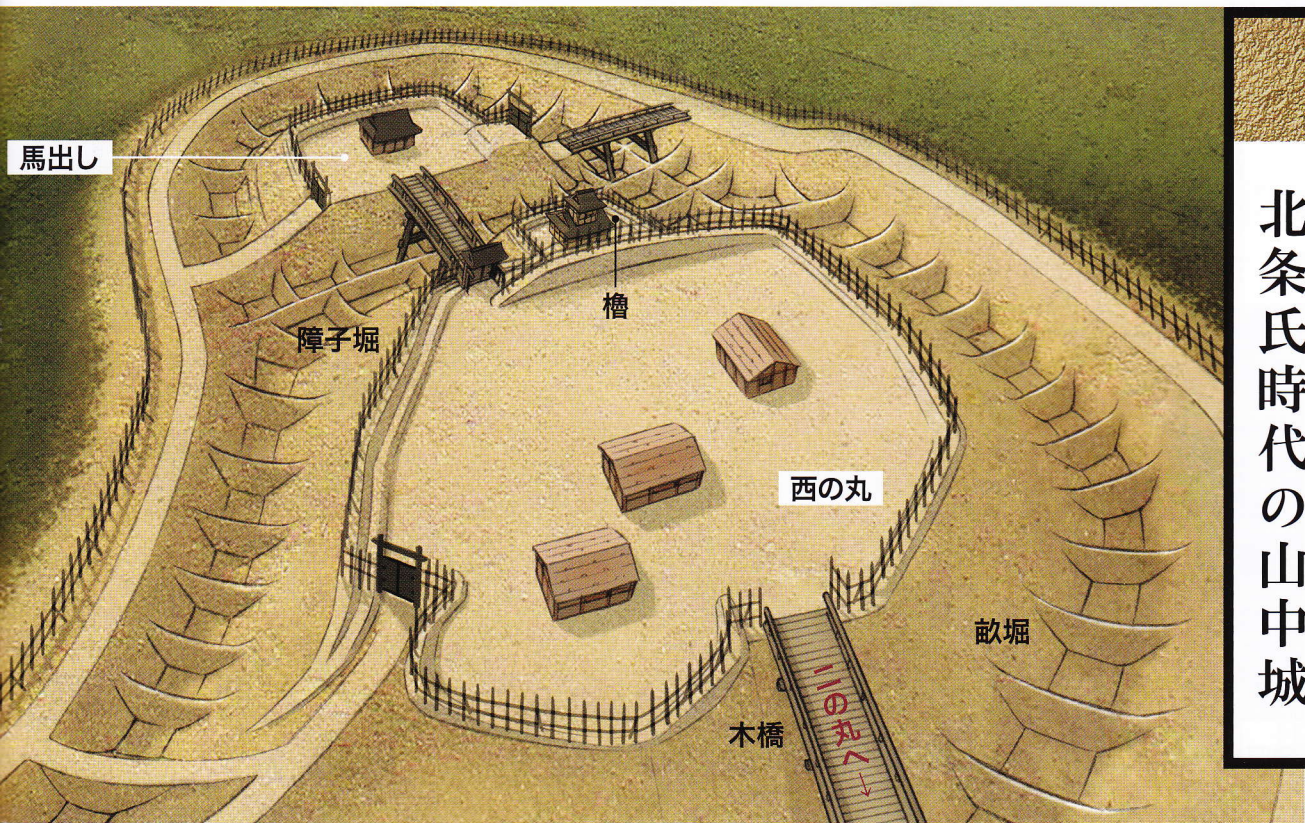
⑧馬出門土橋

⑨住吉櫓

⑩御茶置櫓

⑪小峯曲輪北堀

北条氏時代の山中城



北条氏箱根支城網と豊臣軍



山中城復元イラスト

西の丸の西端には櫓台があり、その横から横堀を渡り、「西櫓」と呼ぶ馬出しに進む木橋が本来があった。馬出しの左右には木橋と土橋があり、城外へは西の丸からの援護を受けて攻め出すことができた。角馬出し、そして敵堀、障子堀は北条流築城術の特徴。
イラスト/富永尚太 監修/千田嘉博

POINT!

山中城、ここがポイント

馬出しと敵堀、障子堀

西への出撃を意図した構え

北条流「境目の城」

北条氏は秀吉との戦いに備え、小田原城惣構えとともに、箱根支城網を強化しました。なかでも山中城は、南のにらやま葎山城、北のあしがら足柄城と連携し、箱根を守る重要拠点でした。

山中城は本丸を中心に、北と南、西へと三方に曲輪を張り出していました(51ページ・案内図参照)。特に豊臣軍が来る西方向には、二の丸から元西櫓、西の丸、馬出し(西櫓)を並べて配置していたのです。曲輪は尾根筋を切った堀切りと、横堀内に仕切りを設けて移動をできなくした敵堀・障子堀で守りました(堀切り、横堀、敵堀、障子堀については126ページ)。

城兵は嚴重に守った曲輪内から反撃したので有利なはずですが、豊臣軍は大きな被害を受けるのを覚悟で、数に任せた力攻めをしました。北条約4000人に対し、約7万人、(実際の攻撃は2万人ほど)の大軍(上の地図)が弓や鉄砲で倒れた兵を乗り越えて、次から次へと押し寄せたのです。双方多数の犠牲を出して、わずか半日で山中城は落城しました。秀吉は全国から大名を動員し、天下人の力を